

Track1

効果音
ドアを開ける音（ガチャ）

（暗く）

男
「あの、すみません・・・」

返事がない。声が聞こえなかったのか？

「あ、あの・・・!!」

ここ、演劇部であってるよな・・・？

効果音
立ち上がる音（がたっ）

女
「おや!? ここに人が来るなんて珍しいから、幻聴かと思った

よー!

劇伴
（BGMスタート）

女
いらっしやい、そしてはじめまして! 君はどうしてここに?

というよりお茶でも用意した方がいいかい?

コーヒー? 紅茶? 牛乳??

まあここにはお茶しかないんだけどね！」

「大丈夫です。水筒（）あるので。」

「そうかい？ というより、君…すっごくくらい！」

「え、暗いですか」

「少し（**強調**）思っただけなんだ。落ち込んだ？ 悪い意味じ

やないよ。」

（絞りだすように）

「いえ。」

「君のその性格・・・昔なにかあったね？ 僕の経験がいつて
るよ！ 君のことをもっと知りたい！」

「え…？ あ…（間を）そんなたいした話はないんですけど。」

Track2

僕には兄がいるんですけど、たくさん話す人で。

・・・だから、僕は発言が遅れて！ いつもとなりで見ている

男

だけでした。話すことをあきらめてしまったんです。

それから、何も言わないから気味悪がられて。

多分、暗くなった原因はこれです。」

（早く。まくしたてるように）

「だから、この部活に入ればなにか変わるかと思って。来てみ

たんですけど」

（哀しそうに）

「うーんじつに可哀そうだ。

女

貴重な話を聞かせてくれた君に

（嬉しそうに）

僕の過去も話してあげよう。もともところこの劇団は、

大学にもう一つある劇団と同じくらい大所帯だったんだ。

（哀しそうに？）

でも、僕が芸を追求すればするほど、部員が減っていった。

ついてこれると思ったんだけどな・・・

（うかがうように。おどおどと。**かぶせて**）

「…横暴だったんじゃないですか…？」

「一里あるなく、なんなら二里も三里もあるかもしれない」

「あの・・・僕も少し**（強調）**思っただんですけど。普段から大

分演劇チックな話し方なんですネ・・・？」

「あゝ。

（へへへみたいな感じで）

いろんな役を一人でやっているから、たまに戻れなくなっちゃ

うんだ。本当の自分ってやつに。」

（BGMストップ）

（録音ストップ 気持ち切り替えてからスタート）

でも、（↑）君も今、本当の自分じゃない。よね？」

Track3

演出

(ここから優しそうに)

男

「うん。きついちゃいましたか。」

女

「だって、もう一つの劇団で、君が荷物運んでのを見たことがあったから。」

で、今日来た本当の理由は？」

男

「偵察に行つてこいって言われたんです。今さっき。」

女

「今さっき？てことは、過去の回想はアドリブ？」

男

「そうですね。そういうの好きなんで」

女

「いいね。才能の塊じゃん！気に入った。」

ねえ、そんなに創作した過去がぼんぼん出て来るんだったらさ、

きつと君なら僕の演劇レッスンにもついて来れるよ、

うちにしとかなくい？」

演出

(ぶりっこっぽく)

男

「んゝん」

男

大学に入った時、演劇部は今の劇団しかないと言われて入部した。もう1つ演劇部がある事を知ったのは学園祭で。

一人で何役もこなす、この人をみたのがきっかけだった。

今日来てみて、うん。やはり、僕が入るべきなのはこっちだと

直感がつげた。

(しますは照れ笑い)

男

「ここにします。」

女

「本当!? 部員が増えたら、やりたいことがいっぱいあったんだ!これから忙しくなるぞゝ!」

男

「お手柔らかに。」

Track4

男

それから1年がたった。

練習は厳しかったけれど、まあ…それなりに楽しかった。

男

今はちょうど新入生歓迎の時期だ。

こんなことをいうのはあれだけど、人が多くて騒がしい。

女

「ふうん。でも、僕らの部室はしずかだね」

男

「え?!」

女

「声に出てたよ。」

男

「ふう（口をすぼめて吸い込む音）（ノイズにならなければ）」

気を付けます。」

効果音

階段を駆け上る音

男

「あゝ」

効果音

ドアを開ける音（ガチャ）

新入生

「すいません!あの〜」

女

「いろいろしゃい！君の過去は!？」